

## 【入選】

### 大好きな川と海のために

塩竈市立玉川中学校  
二年 坂内聡介

友人から「魚オタク」と、呼ばれる私。魚が泳いでいるのを観るのがいやされる。幼い頃から川や海で遊ぶことが好きで、そこに住む生物との触れ合いから、引きずりこまれるように魚が好きになった。中学生になっても夢中で、川へと出かけている。私にとって、川は身近な存在だ。

私が住む塩釜も、海と川とのつながりがとても深い街である。秋になると、三陸塩釜ひがしものが水揚げされる。塩釜仲卸市場で採れたメバチマグロのうち、塩釜にいる日本一の仲買人の目によって厳選された最高品質のもの。その希少性は日本に一本。他の市場で水揚げされた優秀なメバチマグロでも、ひがしものにはならない。そんな貴重なメバチマグロだけではなく、サンマやイワシなども豊富で水産業が盛んである。

昨年の夏休みの宿題で「人がつくった荒川」という本に出会った。荒川の歴史をたどりながら、時代に合わせた荒川の役割や水害との向き合い方、未来のために私達が出来る事が分かりやすくとめられていた。

塩釜の水産業が発達したのは、物流の要だった舟運が栄えていたことに気付かされた。「利水」によって、私の今の生活が守られていた。利水とは、川や湖などにある水を私達の生活を豊かにするために利用することである。私がよく訪れる近くの小川は、住宅地の中にある石畳できれいに整備され、手すりが付いてある。見えている川の長さが五メートルほどだから、どこから来ているのか不思議に思っていた。祖母が「四十年くらい前は、塩釜神社の付元まで川が流れていたんだよ。」と、教えてくれた。とても驚いた。調べてみた所、現在の塩釜のおよそ六割が埋め立て地ということが分かった。私の知る塩釜とは違っていた。よく遊びに行く公園、買

い物をするスーパーも水の中だった。その時代の人々が求める形に川を作りあげ、変化し続けた結果が私が魚つりをする小川になったのだ。

海や川だった土地を埋め立てることにいいイメージはなかった。なぜなら、そこに住む生物の生活を大きく変えてしまうからだ。けれど、その本に出会い、価値観は全く変化した。「利水」だけではない。「治水」もだ。

治水とは、大雨のときに川から水があふれ出して家が流されたり、農作物の被害を食い止めるために堤防を作る等の対策を行うことだ。最近は線状降水帯、大型台風による大雨のニュースをよく耳にする。簡単に人の命を奪ってしまう自然災害の強さは恐ろしい。先人達も同じような水害を何度も経験したから、巨大な土木工事を行い、川の氾らんから人の命や生活を守ったのだ。私には川の流れを変える大きな力はないが、家の前がある側溝のゴミ拾いを定期的に行い排水路を確保することで、万が一の被害を最小限に留めることができると思った。

そして、人々が悪い方向に川の姿を変えた「環境保全」という問題がある。高度経済成長期で工場や家庭から流れ出る汚水や汚物によって、ひどいにおいがするからと埋め立てたのだ。本当に自分勝手だと感じた。小学校の自由研究で海洋ゴミの調査をしたことがある。砂浜に散乱するプラスチック片やビニール袋、花火の残骸が多かった。ゴミの持ち帰りはもちろん、リサイクルゴミの分別は自分でできる行動を続けることが川や海の環境を良い方向へ進めていくはずだ。

安全で豊かな暮らしを支えるために、川を人の力によって形を変えてきたことを学んだ。人が生きるために欠かせない飲み水もきつと先人達の知恵と頑張りが詰まっているのだろう。私の将来の夢は海洋生物学者である。人の生活はもちろん、その場所に住む生物が住ごしやすくなるように研究をして、未来の海をより良いものにつくり変えていきたい。